

研究課題	学びをあじわう
副題	～ICT活用による出会いの演出，濃密なつながり，個に還る学び～
キーワード	ICTの活用，学び合う学び，協働学習
学校/団体名	郡山市立芳山小学校
所在地	〒963-8017 福島県郡山市長者2丁目8-24
ホームページ	http://www2.schoolweb.ne.jp/swas/index.php?id=0710005

1. 研究の背景

本校では、毎年1月最終金曜日に「芳山教育研究発表会」を開催し、今年度で第36回を迎えるに至った。今年度は、「学びをあじわう」という研究主題のもと、副主題「思いに寄り添い、立ち止まる学び」を掲げ、学びをあじわう子どもたちの姿を目指して、日々研修を積み重ねている。学びの対象をあじわい、仲間との協働の中であじわいを深め、自分や他の学びをたどることでそのあじわいの深さを確かめる。これらの一連の学びは、新学習指導要領にある「主体的・対話的で深い学び」のイメージに迫っていけないのではないかと考えた。もっと効果的な対象との出会いによって、子どもたちの学びに向かう推進力を高められるのではないだろうか。もっと違う形の対話的な学びの姿あるのではないか。学びが個に還るために、自らの向上や変容を実感させる振り返りの場が必要ではないか。これらの課題を見据え、授業の充実に進めてきた。授業の充実を目指すICTの活用の在り方を探っていくことが、学びのあじわいの深まりにつながるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

本年度は、副主題を「思いに寄り添い、立ち止まる学び」として、授業における子どもたちの様々な思いに寄り添い、時に立ち止まって考え合う場面、つまり、互いの分からなさを押し量りながら、教科本質の深みに迫るような場面で、考えをつなぎ、一人一人の考えを深めていくことができる授業を中心に研究を進めていくこととした。そして、その学び合う学びを深める一つの手段としてICTの活用の在り方を研究することとした。

①研究組織内の担当教科におけるICTの活用による「学びをあじわう」の授業実践

ICTを活用することで、教材・資料の魅力的な提示から問いを見いだすこと、資料を調査・比較・関連・分類させること、そこから子どもたち一人一人が再び学びを捉え直すことなど、思考の可視化や情報の共有化が図られる授業展開を工夫していく。あくまでも、思考のための道具として位置づけていく。

②事前研究会・事後研究会・研究発表会でのICTを活用した効果的なプレゼンテーション

「学びをあじわう子どもたちの姿がどのようなものであったか」を振り返るために、動画、静止画を駆使して、子どもたちの学びの姿を見取っていく。さらに、参観の教師が互いに見取った子どもたちの学びの姿を語り合うことを大切にすることで、次の授業へ生かし、授業を見る力を高めていく。

3. 研究の経過

本年度の研究主題へ向けて、一人あたり学期1回、計3回以上の研究授業を実施した。3学期は、教育研究発表会にて、授業を公開した。

月	研究内容	
4	<ul style="list-style-type: none"> ・研究推進委員会 ・研修全体会（昨年度の課題と今年度の方向性） ○事前研究会・第1回研究授業・事後研究会 第4学年社会科 <p style="text-align: right;">講師：福島大学准教授 坂本 篤史先生</p>	観察記録 写真・ビデオ
5	<ul style="list-style-type: none"> ○事前研究会・第2回研究授業・事後研究会 第4学年音楽科 ○事前研究会・第3回研究授業・事後研究会 第6学年理科 ○事前研究会・第4回研究授業・事後研究会 第2学年国語科 	観察記録 写真・ビデオ
6	<ul style="list-style-type: none"> ○事前研究会・第5回研究授業・事後研究会 第5学年体育科 ○事前研究会・第6回研究授業・事後研究会 第3学年国語科 ○事前研究会・第7回研究授業・事後研究会 第2学年道徳科 <p style="text-align: right;">講師：同志社女子大学現代社会学部現代子ども学科 准教授 吉永 紀子先生</p> <ul style="list-style-type: none"> ○事前研究会・第8回研究授業・事後研究会 第1学年算数科 ○事前研究会・第9回研究授業・事後研究会 第6学年国語科 ○事前研究会・第10回研究授業・事後研究会 たんぽぽ学級自立活動 	観察記録 写真・ビデオ
7	<ul style="list-style-type: none"> ○事前研究会・第11回研究授業・事後研究会 第3学年算数科 ○事前研究会・第12回研究授業・事後研究会 第1学年音楽科 ○事前研究会・第13回研究授業・事後研究会 第5学年算数科 ○事前研究会・第14回研究授業・事後研究会 すみれ学級算数科 	観察記録 写真・ビデオ
8	<ul style="list-style-type: none"> ・研究推進委員会 ・研修全体会（1学期の授業の振り返り、2・3学期に向けての方向性） 	
9	<ul style="list-style-type: none"> ○事前研究会・第15回研究授業・事後研究会 第6学年理科 ○事前研究会・第16回研究授業・事後研究会 第2学年国語科 	観察記録 写真・ビデオ
10	<ul style="list-style-type: none"> ○事前研究会・第17回研究授業・事後研究会 第3学年国語科 ○秋の公開・第18回研究授業・事後研究会 第5学年算数科 <p style="text-align: right;">講師：東京大学大学院教育学研究科長 教育学部長 教職開発コース 教授 秋田 喜代美先生</p> <p style="text-align: right;">講師：同志社女子大学現代社会学部現代子ども学科 准教授 吉永 紀子先生</p> <ul style="list-style-type: none"> ○事前研究会・第19回研究授業・事後研究会 第4学年社会科 ○事前研究会・第20回研究授業・事後研究会 すみれ学級算数科 ○事前研究会・第21回研究授業・事後研究会 第6学年国語科 ○事前研究会・第22回研究授業・事後研究会 第2学年道徳科 	観察記録 写真・ビデオ
11	<ul style="list-style-type: none"> ○事前研究会・第23回研究授業・事後研究会 第3学年算数科 	観察記録

	○事前研究会・第24回研究授業・事後研究会 第4学年音楽科 ○事前研究会・第25回研究授業・事後研究会 たんぼぼ学級自立活動 ○事前研究会・第26回研究授業・事後研究会 第1学年音楽科 ○事前研究会・第27回研究授業・事後研究会 第5学年体育科	写真・ビデオ
1 2	○事前研究会・第28回研究授業・事後研究会 ひまわり教室自立活動 ・研究推進委員会 ・研修全体会（2学期の授業の振り返り，3学期に向けての方向性）	観察記録 写真・ビデオ
1	○第36回芳山教育研究発表会 全14クラス公開授業 講師：東京大学大学院教育学研究科長 教育学部長 教職開発コース 教授 秋田 喜代美先生 講師：同志社女子大学現代社会学部現代こども学科 准教授 吉永 紀子先生	観察 写真
2	・今年度の振り返り・プログラミング出前講座・学力テスト分析	記録の振り返り
3	・研究推進委員会（成果と課題，次年度へ向けての計画）	成果と課題

4. 代表的な実践

(1) 第4学年 社会科「桜前線はどうしてこんな形なの？」(研究の目的①の授業実践例)

福島県の桜前線の形を示すことで、「どうしてこんな形なのか？」という問いが生まれ、気温、降水量などの気候の特徴が分かる資料をもとに、考えていった。

後半は、これまでの社会科の学びから「地形も関係するのでは？」という問いが生まれた。



40インチのテレビ兼大型ディスプレイとタブレット端末で、教師側から桜前線の図や動画、気温・降水量のグラフ、地形図などの資料を配付した。子どもたちは、自分の考えを書き込むことで可視化したり、仲間の考えを互いに比較したりすることで、共有し学びを広げていった。



子どもたちは、「資料のどこに根拠をもったのか」資料の着目した部分を示しながら仲間に語る姿が見られた。また、疑問や分からないところは、互いに納得するまで聴き合うこともできた。

さらに、ICTの資料だけでなく、根拠となる仲間の考えと自分の考えとを結びつけて、語る姿も見られるなど、ツールとしてのICTの活用が見られた。

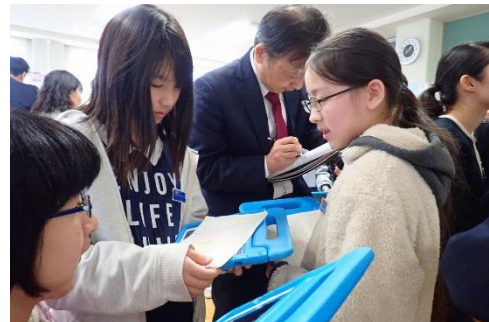
振り返りでは、タブレット端末内の自分の考えの蓄積や仲間の考えをもとに、本時で学んだことを改めて見つめ直し、記入する姿が見られた。



(2) 第6学年 国語科「海の命」(研究の目的①の授業実践例)

これまでの学習で仲間と考えたい問いを追究してきた。問いに対しての自分の読みを仲間と語り合うことで、読みを深めてきた。

お互いの読みをタブレット端末内のロイロノートに書き出したものをもとに聴き合う。考えの蓄積を生かして、自分の読みを確かにする姿が見られた。



また、単元を中心となる活動に朗読を位置付けた。自分の読みを生かした朗読ができるよう、音声で録音したものを互いに聞き合っていた。何度も試すことができるので、納得するまで自分の読みを朗読に表そうとする姿が見られた。

仲間と共に朗読する姿も見られるなど、表現の幅が広がり、読みをあげることができた。



(3) 事後研究会でのプレゼンテーション（研究の目的②のICT活用のプレゼンの例）

授業を録画する。事後研究会では、ビデオを見ながら、1時間の中のどの部分であるのか、参観の教師がそれぞれ見取った子どもたちの学びの姿を授業の流れと合わせて述べ合う。

子どもたちのつぶやきや仕草、また、視線や体全体をとらえ、どんな学びであったかを語り合い、それが授業のどこからくるものかを考え合った。



また、写真記録担当の教師が、1時間の授業で見せる子どもの学びの姿を写真におさめ、見取ったことを語る時間を設ける。動画とは違う子どもたちの学びの瞬間を静止画でとらえていくことで、その学びをどう見たのかを考え合う。互いを見取りを語り合うことで、授業を見る力を高めていった。



(4) 授業に臨む上での、子どもたち一人一人の学びのカルテの作成（研究の目的②）

学びの振り返りを蓄積することで、一人一人の学びの姿や学びが物語るものが何であるかを探ってきた。（学びのカルテ）

また、拡大印刷機を使い、物語の全文掲示や前時の板書掲示に生かした。子どもたちの学びの連続を見取ることができた。



<p>① 三角形の面積を求めよう。底を2cm、高を3cmの三角形の面積を求めよう。</p> <p>② 三角形の面積を求めよう。底を4cm、高を2cmの三角形の面積を求めよう。</p> <p>③ 三角形の面積を求めよう。底を5cm、高を3cmの三角形の面積を求めよう。</p>	<p>④ 三角形の面積を求めよう。底を6cm、高を4cmの三角形の面積を求めよう。</p> <p>⑤ 三角形の面積を求めよう。底を7cm、高を5cmの三角形の面積を求めよう。</p> <p>⑥ 三角形の面積を求めよう。底を8cm、高を6cmの三角形の面積を求めよう。</p>	<p>⑦ 三角形の面積を求めよう。底を9cm、高を7cmの三角形の面積を求めよう。</p> <p>⑧ 三角形の面積を求めよう。底を10cm、高を8cmの三角形の面積を求めよう。</p> <p>⑨ 三角形の面積を求めよう。底を11cm、高を9cmの三角形の面積を求めよう。</p> <p>⑩ 三角形の面積を求めよう。底を12cm、高を10cmの三角形の面積を求めよう。</p>
---	---	---

5. 研究の成果

本校では「学びをあじわう」の実現に向けたICTの在り方を探る授業の展開を目指してきた。

(1) ICTを活用した授業実践

子どもたちにとって、より視覚的で、動的で、魅力的な課題や資料の提示が見られ、そこから問いを見いだすことができた。また、子どもたちがタブレットを活用して資料を調査・比較・関連・分類させることを繰り返し経験することで、タブレットを道具として使いこなせるまでに操作の技能が高まった。書き込みや訂正が簡単に行えるため、考えの根拠となる資料への働きかけがさかんになった。また、互いの考えを共有化することも容易なので、たくさんの考えを比較しやすかったと思われる。学んだことを振り返る上でも、蓄積もできるので、自らの学びの足跡をたどることもできた。

(2) 各種研究会でのICTを活用した効果的なプレゼンテーション

子どもたちの学びを見取るために、動画や静止画での記録をプレゼンで見合い、互いの見取りを語り合うことができた。授業をどう見るかは、参観者にゆだねられている。その子の学びをどう見るかという視点で研究会を継続してきた。プレゼンテーションでの振り返りを通して、授業者だけでなく、参観者の授業を見る目も高めることができた。

6. 今後の課題・展望

(1) 授業充実に根差したICT活用

はじめにICTありきではなく、授業のねらいにより効果的であるという点で、活用の在り方を探っていく必要がある。また、子どもたちの扱い方などの技能を高める上では、経験が必要である。どう使うかという使用のねらいと可能性を重ねて考えていきたい。

(2) 学びの深まりへ向けて

ICTを活用していく中での、子どもたちの興味・関心に応じて、情報の処理や調査の幅が広がることがあった。広がりや高まり、一見停滞している学びに見えるときの中ですえも、それらの中から、一人一人の学びにどう活用していくのかが、学びの深まりへの重要な捉えと考える。また、プレゼンなどの活用で、子どもたちの学びを見ると同様に、子どもたちが自らの学びの蓄積を振り返ったり、仲間との学びをたどったりすることを日常的に繰り返していくことで、さらなる深い学びへ向かっていくと考える。その日常化を目指していきたい。

7. おわりに

「学びをあじわう」の実現に向けて、今年度は助成をいただいたことで、大型ディスプレイや提示装置などの導入、講師の招聘など、例年以上に充実した研修を進めることができた。授業実践のねらいに応じたICTの在り方を探っていくことで、より授業の充実が図られると感じている。今後も効果的な活用の仕方を模索しながら授業実践に励んでいきたい。

8. 参考文献

- ・ パナソニック教育財団『平成30年度成果報告書』<http://www.pef.or.jp/school/grant/evaluation/>